

-震災がつなぐ全国ネットワーク-
新燃岳噴火災害支援 活動報告書



■ 経緯

2011年1月26日、52年ぶりに噴火した霧島連山・新燃岳は、主に東部の麓にあたる宮崎県都城市や高原町に激しく火山灰を降り注ぎ、高原町の一部地区では避難勧告の発令により、住民が避難生活を余儀なくされる事態となった。2011年2月1日、災害ボランティアに関する研修会が京都で開催され、震災がつなぐ全国ネットワーク代表・栗田（NPO 法人レスキューストックヤード代表理事）、および同顧問・村井雅清（被災地NGO協働センター代表）が講師で招聘されていたが、その受講者に高原町在住の住民（後々拠点となる浄土真宗本願寺派・光明寺坊守さん）が参加されており、町全体が混乱している実情を聞かされた。噴火による二次災害の懸念もあったことから、支援活動のタイミングを見計らっていたが、ボランティアによる支援の必要があると判断し、日本財団の初動対応金の拠出の了解を得て、2月6日より先遣隊を派遣することにした。

■ 派遣者

氏名	所属	期間	備考
吉椿 雅道	被災地NGO協働センター	2/6(日)~16(水)	
岡本 千明	被災地NGO協働センター	2/14(月)~17(木)	
頼政 良太	被災地NGO協働センター	2/14(月)~17(木) 2/28(月)~3/4(金) 3/9(水)~13(日) 3/20(日)~25(金)	他、中越・KOBE 足湯隊3名 (2/14(月)~17(木))
法化図 知子	被災地NGO協働センター	3/5(土)~11(金)	
栗田 暢之	レスキューストックヤード	2/7(月)~10(木) 2/29(火)	
加藤 祐子	レスキューストックヤード	2/7(月)~17(木) 2/25(金)~3/9(水) 3/25(金)~29(火)	
大谷 琴美	レスキューストックヤード	2/16(水)~24日(木) 3/4(金)~10(木)	
藤田 直美	レスキューストックヤード	3/13(日)~20(日)	
柴田 貴史	とちぎボランティアネットワーク	2/16(水)~24(木)	
岡田 雅美	災害ボランティアコーディネーターなごや	2/21(月)~27(日)	

- ※ その他関連する団体として、大分県内社協職員、昨年度事業「移動寺子屋」でつながれた博多あ
ん・あん、屋根の除灰の専門ボランティアとして中部防災ボランティアのメンバーも参加した。
- ※ 3月13日（日）には、日本災害復興学会復興支援委員会および関西学院大学災害復興制度研究所
主催の「被災地車座トーク」が都城市・高原町でそれぞれ開催された。（初の噴火災害に対処する
ために過去に被災体験をした地域からの体験者を招いて体験談を聴く会）

■ 活動内容

《拠点》

光明寺／〒889-4412 宮崎県西諸県郡高原町大字西麓 878

TEL:0984-42-2764 FAX:0984-42-2782 E-mail:ko-myoji@forest.ocn.ne.jp

《調整》

- ・ 全社協・宮崎県社協を通じて都城市社協・高原町社協（各ボラセン）へ挨拶・状況確認
- ・ つぶやきをボラセンに届ける（高原町・都城市）（※つぶやき詳細は別紙1参照）



《足湯》

- ・ 高原町内避難所「ほほえみ館」での足湯活動の開始（2月8日～15日まで）
- ・ 出張足湯（高原町内・都城市内・小林市内のお宅・施設 光明寺の紹介による）
- ・ 都城市山田町・正定寺での足湯（光明寺の紹介による）
- ・ 高原町内デイサービスでの足湯（光明寺の紹介による）
- ・ 光明寺での永代経法要（3/6）で青山学院大学の学生20名（3/1～3/9）と連携して足湯を実施（「新燃岳噴火災害の被災地・高原町を全国から応援しよう！」企画（詳細は別紙2参照））
- ・ 光明寺の婦人会・お彼岸行事での足湯
- ・ 地元の女性の集まり「ヘルスメイト」のメンバーに足湯を実施



《灰の除去作業》

- ・ 出張足湯と一緒に作業手伝い
- ・ 光明寺・たかはるハートム（現地 NPO）の把握しているニーズに対応
- ・ 震つなメンバーでつながったお宅から紹介、訪問
- ・ 青山学院大学の学生 20 名と連携
- ・ 都城市山田町・正定寺さんからの紹介で降灰のひどい夏尾地区のお宅を訪問
- ・ 一度訪問したお宅を再訪問して現状確認、別のお宅を紹介してもらい作業実施



■その他

● 高原町内の動き：

《社協》

- ・ 2月7日に町の災害ボランティアセンターを設置（～2月28日閉鎖）
- ・ 募集は県内ボランティアに限定
- ・ ニーズ対応は高齢者（65歳以上）・障がい者・一人暮らしに限定
- ・ 灰の除去作業のみ対応

《町役場》

- ・ 1月26日に災害対策本部を設置

《地元 NPO・たかはるハートム》

- ・ 町内唯一の NPO 団体。
- ・ 平常時は自死問題に取り組む
- ・ 発災後、すぐに県内・県外からボランティアを募集
- ・ 地元を知る人間によるネットワークで活動を行う
- ・ 東日本大震災発災後、支援活動（物資集め・チャリティーイベント開催など）を開始

《光明寺》

- ・ お寺を拠点として、門徒さん初め、地域のつながりの中からニーズの掘り出し
- ・ 震つなメンバーの受け入れ・顔つなぎ・調整
- ・ 持てるネットワークを駆使して人的・物的支援の呼びかけを継続的に行っている
- ・ 近隣市町村のお寺への呼びかけ

● 高原町の概要

人口 9,935 人で、周りの町では市町村合併が進んだが、周辺で唯一残る町である。農業・畜産が盛んで、その両方を営む家庭も多く、今回の災害が今後の生活に打撃となっている。高齢化が進み、若者は町外・県外へと出ていく地方都市の典型的なかたちとなっている。一方で、血縁での助け合いの動きも強く、今回の災害でも親戚同士で助け合ったという話を聞いた。そういったつながりがない人がとりのこされる傾向もある。

今回の噴火災害では、風向きの関係で都城市の降灰がひどく灰の粒も粗かった。高原町ではパウダ一状の灰が降り、取りきることが難しいため、何カ月経っても風の強い日は空气中を舞っている。

● まとめ

約 2 カ月間の支援活動で、初期段階では避難所での足湯活動や、個人宅での灰の掃除のお手伝い及び訪問足湯を中心に行ってきた。住民の方からお聴きした生の声（つぶやき）は高原町・都城市の社会福祉協議会にお届けした。活動を通して「声が出せなかった人」「どこに声をあげたらいいのかわからない」というような顕在・潜在ニーズと向き合っていく必要があると感じ、ボランティアセンター閉鎖後も光明寺を拠点として、戸別訪問（再訪も含む）を行い、ニーズを拾っていった。ちょうど青山学院大学の学生 20 名が 3 月上旬にボランティアに来ることをきっかけに、それまで遠慮してなかなか言えなかった方のお手伝いもできた。その後は近隣からのボランティアを集めることに苦労していたが、3 月後半に入って少しずつ近隣の大学生の参加もあり、一緒に足湯活動や掃除、被災地 NGO 行動センターの事業「野菜サポーター」(※1) の手伝いを行った。3 月 11 日に発生した東日本大震災で、新燃岳の災害についての情報が急激に減った。住民の方の間にも「向こうの方が大変」という意識があり、また、噴火が小康状態ということもあって、さらにニーズがあがらない状況になった。活動の長期化により、住民の疲労も溜まっており、休憩の必要性も感じる。

今後は、継続的な噴火や降雨による土石流も懸念されているため、緊急時の避難計画を含めた防災の取り組み、助け合いの仕組み作りが必要とされる。活動の中で聴いた「つぶやき」でも「いつまた大きな噴火があるかわからない」「土石流の夢をみる」「うちは雨が降ったら流される」などの声もあった。避難対象地区の方を中心とした多くの方が、今後についての心配をしている。住民側からの自主的な取り組みが展開されるよう、高原ハートムの代表でもある行政職員の方に調整を託して、一次派遣期間を終えることとした。今後は継続的に常駐という支援体制から、定期的に関わる体制へと移行する。今後も拠点にさせていただいた光明寺の行事に合わせて地元の方と足湯などを行いたいと思っている。また、緊急時には支援に駆けつけたい。

(※1) 野菜サポーター：

「困ったときはお互いさま、被災地から被災地を支援しよう！」というコンセプトのもと、噴火で被害を受けた宮崎県産の野菜を買い付け、東北の被災者の方への炊き出しに使うという被災地 NGO 協働センターが始めた事業のこと。

※別紙 1

■つぶやきの分析

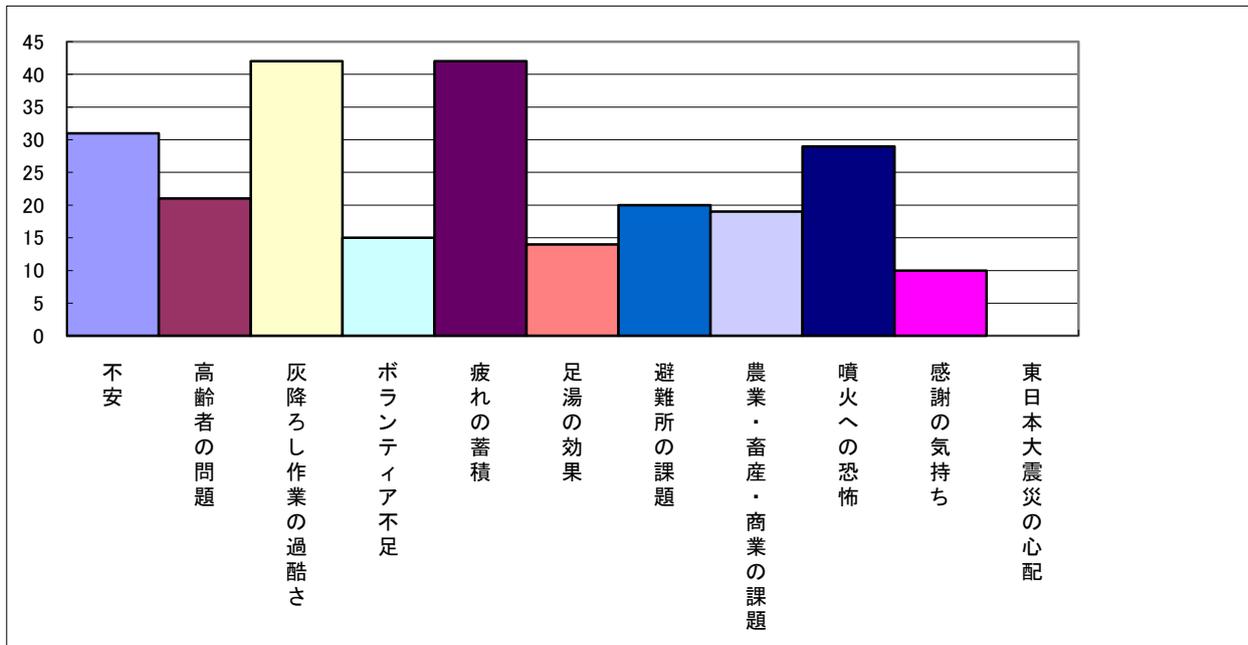
新燃岳噴火災害の支援活動中に聞いたつぶやきを前後半に分けて、下記項目別に分類した。それぞれの分類の中でどの時期にどのようなつぶやきを聞いたかをまとめた。

◇前半（2月6日～2月28日）

- ・ 場所：
 - 高原町内：避難所（ほほえみ館）・光明寺・狭野地区・花堂地区・瀬田尾地区・デイサービス施設・温泉施設 他
 - 都城市内：山田地区・夏尾地区
- ・ 男女別：男性 84 名／女性 65 名 計 149 名
- ・ 年齢別：

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
3	2	2	11	34	29	33	32	3

- ・ 分類グラフ：



※ひとつのつぶやきでも複数の項目に分類したものがある。

○不安

避難生活をしている方は特に、「いつになったら帰れるのか」「自宅のことが気になる」などの不安を抱えて生活をしていた。徐々に将来への不安の声も聞こえ始めた。

- ・ 「川沿いで土石流が出たら一番最初にやられる。もう諦めてる。」（50代・男性）
- ・ 「3週間で（牛を）別の場所に移動させないと

いけない、まだ行き先が決まっていない。先が見えなくて不安だ。」（70代・男性）

- ・ 「今日は雨で心配だから、家族で避難してきた。犬がまだうちにいるの。」（10代・女性）
- ・ 「心配でいつでも避難できる準備をしている。」（70代・男性）
- ・ 「もう噴火しないで欲しい。願うばかり。」（50代・女性）

- ・ 「家の片づけはいつになったら出来るのか…」
(30代・男性)
- ・ 「いつかもっと大きいのがくるかもしれん。」
(50代・男性)
- ・ 「災害が起きていろんな問題が加速して浮き彫りになってきている。噴火があって、若者がどんどん出て行って、高原はどうなってしまふんじゃろ...と思うことがある。」(40代・男性)

○高齢者の問題

高齢者で持病を持っている方などは特に、避難所生活や灰の掃除で苦労されていた。がんばり過ぎる傾向もあり、無理を押しして生活しているように感じた。また一人暮らしの方が多く、声をあげられずに抱え込む人が多い。

- ・ 「80歳でも屋根に登らな仕方ない。」(80代・男性)
- ・ 「左の脇腹が時々痛むからマッサージしている。」(80代・女性)
- ・ 「ぜんそくがひどくて、今日病院に行った。ひとりで歩いて行って点滴もした。」(80代・女性)
- ・ 「過疎化で近所に若い人がいない。さみしいよ。近所も同じように灰がたくさんあるから「どげんしよう」と思っていた。来てもらってありがたいよ。」(70代・男性)
- ・ 「リウマチだから動かすと痛くて。でも、作業もしないといけないのよね...」(70代・女性)
- ・ 「1人で暮らしているから、本当に怖いよ。」(80代・女性)

○灰降ろしの作業の過酷さ

最初の噴火では、掃除してもすぐに元通り真っ白になり、繰り返しの作業でかなり苦労されていた。想像以上に灰が重たく、一軒のお宅でも降灰袋数百袋を使う程の量の灰が積もっていた。ビニールハウスや牛舎を持っている方は、途方もない

気持ちで掃除をされていたように感じる。多くの方が足腰を痛めながら毎日掃除をしていた。町のあちこちで屋根の上の除灰作業が行われていた。

- ・ 「腰が痛いけど、主人が灰の片づけしてるのに私だけ休む訳にはいかない。」(60代・女性)
- ・ 「ハウスを掃除したけど、また積もった。灰の掃除をしようとしたけど灰が隣に飛んで行くから、止めた。自分の家も灰が隣から飛んできた。」(60代・男性)
- ・ 「若いけど、今はけっこうきつい。でもがんばる。」(20代・男性)
- ・ 「今日も屋根にのって作業したけど、本瓦はようすべる。あぶないわ。」(50代・男性)
- ・ 「自分たちで250個(満タン)。(息子たちが手伝ってくれたから楽だった)」(70代・女性)
- ・ 「灰の除去で髪の毛がバサバサになる。手も荒れる。手袋が欠かせない」(50代・女性)
- ・ 「衣服から払ったつもりでも家の中に大量に灰が入り込んでいる。」(50代・男性)
- ・ 「毎日、灰の除去でクタクタ、ここにも1日何往復もしているよ。俺の家だけで10トンくらい灰が出ているよ」(70代・男性)
- ・ 「本当に腰が痛い。これで10往復目。灰捨て場まで往復1時間もかかる」(60代・男性)
- ・ 「1回目の噴火の後には、掃除しても掃除してもキリがなかった。ちょっと休憩して1時間後には元の状態に戻っている。」(80代・女性)
- ・ 「毎日片付けているけど、噴火したらまた山積みになる。」(50代・女性)



○ボランティア不足

ボランティアセンターの情報自体が周知されていないのと、「一人暮らしの65歳以上、障がい者に限る」というボランティアセンターの方針が壁となり、なかなかボランティアによる支援活動が円滑に進まなかった。また屋根の上の作業の危険性もネックとなっていた。

- ・「ボランティアセンター、明日行ってみようかなあ、高齢者は何歳からなんだろう、自分もいいのかなあ。」(60代・男性)
- ・「うちはまだやっとならん。ボランティアもお願ひしとならん。」(70代・男性)
- ・「80で一人暮らしだから、鹿児島のボランティアさんが来て屋根の上をやってくれた。本当に助かった。」(80代・女性)
- ・「役場に頼みに行ったが65歳以上の単身高齢者、障がい者が先で若い人と同居していたり県内に親戚がいる人は断られた」(50代・男性)
- ・「業者に頼もうと思ってたら、遠くにいる息子がボランティアを頼んでくれて助かった。」(80代・女性)
- ・「うちは工場なんだけどね、息子が高所恐怖症で、屋根には登れんのよ。」(50代・女性)

○疲れの蓄積

長期間にわたる作業と先の見通しがたたない不安で、疲れがどんどん蓄積されていた。

- ・「足がパンパン。ずっと立ち仕事だから。」(60代・女性)
- ・「あ〜、気持ちいい。こんなにほっこりした気持ちになったのは、本当に久しぶり。26日からずっと大変だったから。」(60代・女性)
- ・「子供も疲れてるんだ。」(10代・女性)
- ・「毎日、灰まみれで嫌になるよ。」(50代・男性)
- ・「避難所から帰ってきて、やる気力がなくなってしまった。」(50代・男性)
- ・「この1カ月間、何をしていたか忘れた！」(30

代・女性)

- ・「疲れがとれない、昼間もうとうとして横になったりしている。」(50代・男性)

○足湯の効果

避難所で就寝前にさせていただいた足湯は、よく眠れると好評だった。その後も足湯がつかないで縁で、ここで出会った方々のお宅の掃除やその知人宅の掃除をさせていただくことにもつながった。

- ・「足湯で体が暖まったわ。」(60代・男性)
- ・「昨日はよう眠れたわ〜」(70代・男性)
- ・「今日で足湯は3回目かな。気持ちいい。もう眠くなったわ。」(50代・男性)
- ・「わーこんなんしてもらえて嬉しいわー。気持ちええわー。」(60代・女性)



○避難所の課題

特に高齢者から、身体の不調や生活の不便さを訴える声を多く聴いた。また、日中仕事に出かけている人や、家の灰掃除にでかける人もおり、自分で動けない高齢者が避難所に残り残されていた。

- ・「床が板張りで寒い。」「靴下がひとつしかない。洗濯したい。」(80代・女性)
- ・「避難所生活をしていた時には、血圧も高くなって、今思えば、気分も落ち着かんかったんだろうか。」(80代・男性)
- ・「昼は仕事で夜帰る。普段はどんぶり2杯のご飯を食べるが、避難所ではおにぎり2個とお味噌汁だけ。働いて帰ってくる若い衆は足りん。高齢者も若者も子どもも同じなのはお

かしい。」(60代・男性)

- ・「腰が痛くて。避難所は畳の上に毛布一枚で硬いから。何日かだったらいいけど、2週間もだからストレスもたまる。」(60代・男性)
- ・「帰ったらまず掃除から。避難所はしんどかった。夜は2〜3時間しか寝ていない。」(50代・男性)
- ・「避難所は1日いただけ。トイレとか薬とかで困ったから。」(80代・女性)

○農業・畜産業・商業の課題

多くの方が今後の生計を心配しておられた。わが子のごとく大切に育てた牛や野菜を苦渋の思いで手放すことになった方もいらっしやった。農地改良にしても畜産にしても一からの再スタートには時間も費用もかかり過ぎる。国からの補償もないことから途方に暮れていた。

- ・「牛を飼っていたが、19日に競りにかけられる。」(70代・女性)
- ・「畑は全部ダメ。野菜はそのまま鳥の餌にするよ。野菜は灰で汚れているから、売らずに人にあげている。」(60代・男性)
- ・「20頭飼っているが今回の災害で小林で避難させている。毎日、小林に行きエサやりをして、家に帰って灰降ろし作業。」(50代・男性)
- ・「山野草を栽培しているが、ほぼ全滅した。これからの生活が不安。生業に対する支援はないのかなあ。」(50代・男性)
- ・「椎茸は、急にぽっと出来るものじゃないからね。原木を切ることからやって、椎茸ができるのに3年はかかる。」(70代・女性)
- ・「去年より(牛の競りの話)7万くらい値上がりしてる、口蹄疫で全頭処分した市町村があるからね。大変だよ。」(60代・男性)

○噴火への恐怖

最初の噴火が夜中だったこともあり、暗闇に稲光が見えて、何時間も空振が続いたという話を、

たくさんの方からお聴きした。

- ・「突然の噴火で本当に怖かった。真っ黒い煙がこっちに向かってきた。命があってよかった。」(60代・女性)
- ・「今日は小林に石がとんできた。こんなのが続いてガラスも割れるし大変。」(20代・男性)
- ・「噴火の音が大きく本当に恐かったよ。灰が窓ガラスにボツボツと当たる音がすごい。」(70代・女性)
- ・「妻が怖がって一緒じゃないと外出しなくなった。」(70代・男性)
- ・「こんなのが飛んでくるんだよ(噴石を見せて)夜空に真っ赤な噴火が起きてとても怖かった。この世の終わりを感じた。」(70代・女性)
- ・「本当に怖かったよ。初めころは、着替えを両手に持って、家の中をうろうろするばかり。真っ赤な煙が出ていて、きのこ雲で原爆みたいだった。」(80代・女性)
- ・「最初は空から石が飛んでくるなんて夢かと思った。」(80代・女性)
- ・

○感謝の気持ち

大変な状況の中、多くの方がボランティアを含む他者に対して感謝の気持ちをのべられていた。人がそばにいることで、心が少しでもやすらぐことがあると感じた。

- ・「庭をきれいにしてもらえただけで気持ちが楽になったわ。」(70代・男性)
- ・「本当にありがとう、よそ様に手伝ってもらえるなんて思ってもいなかった。(何度もくり返し、泣いていた)」(70代・女性)
- ・「避難所での生活は人に助けられていることを毎日違う形で実感している。いずれみんなに恩返ししたいと思っている。」(50代・男性)

○東日本大震災の心配

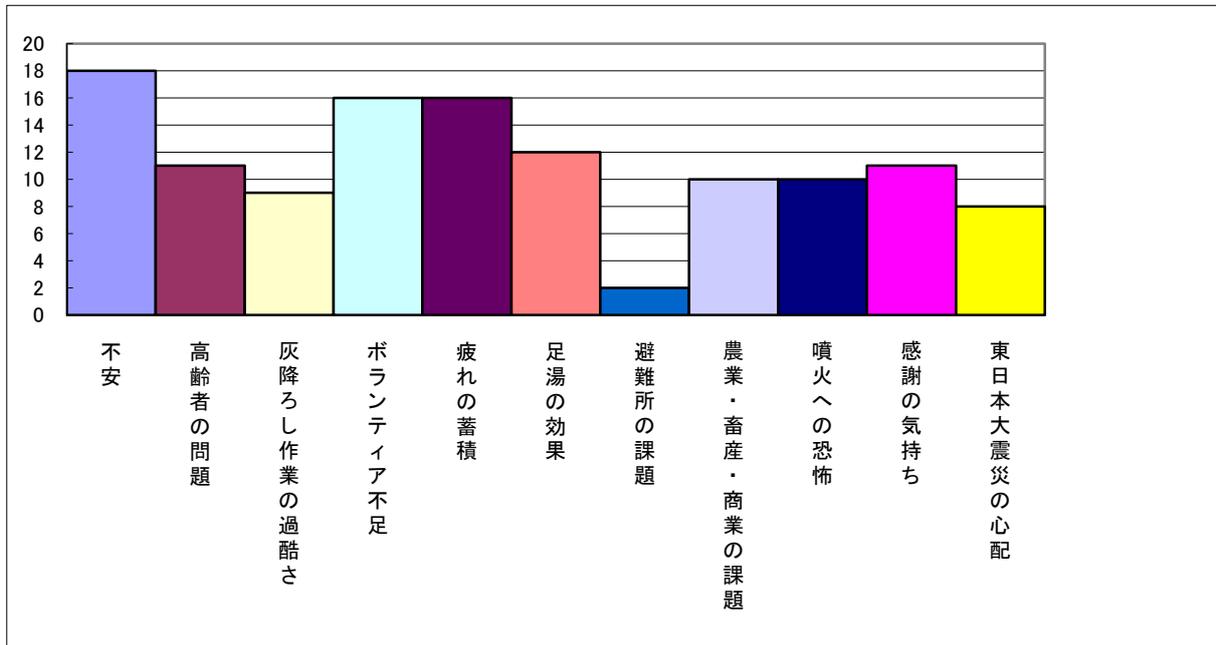
前半はなし

◇後半（3月1日～3月29日）

- ・ 場所：
 - 高原町内：光明寺・狭野地区・後川内地区・西麓・広原・町役場 他
 - 都城市内：山田地区・夏尾地区
 - 小林市内
- ・ 男女別：男性 25 名／女性 52 名 計 77 名
- ・ 年齢別：

10代未満	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
1	1	5	9	13	14	24	10	0

- ・ 分類グラフ：



※ひとつのつぶやきでも複数の項目に分類したものがある。

■解説

前半からの変化は、不安が増えたこと（不安に思っていることの内容も変化※下記参照）とボラセン閉鎖に伴い積極的に行った戸別訪問により、ボランティア不足が明らかとなり、長期戦による疲れの蓄積も顕著であった。光明寺で行った3月6日の永代経法要時の足湯や、戸別訪問時に行った足湯で聴いた足湯に関する声も多かった。また、火山活動が小康状態にあることから、灰降ろし作業の過酷さに対する声や噴火に対する恐怖がやや減り、逆に東日本大震災に関する声が多くあがった。

○不安

今後に対しての不安の声が多く聴こえるようになった。噴火の終わりが見えないため、この先の見通しを立てられない人がたくさんいる。また不安で眠れないという声も多く聴いた。

- ・ 「夫婦二人だったら何年かかるだろうかと思

ってた。ボランティアがきてくれるんなら嬉しい。」（60代・女性）

- ・ 「噴火がいつ起きるかよくわからないから夜も不安。」（40代・男性）
- ・ 「帰っても忘れないでね。ねえ、次はいつくるの？」（10代・女性）

- ・ 「毎日噴火の夢をみる。うちの嫁は毎日土石流の夢をみると言ってる。」(30代・男性)
- ・ 「風向きが変わるとうちの方も降るかも。農家だからとうもろこしの植え付けをするかどうか迷ってる。植えて全部だめになったらと思うと踏ん切りがつかない。」(50代・女性)

○高齢者の問題

高齢者の方の中には、1カ月以上たってもまだ自宅の掃除を始めていない方がいる。ボランティアセンターが開所していたことすら知らない方もいた。自分から声をあげることは困難だ。身体が自由に動かず作業が思うように進められず困っている人もたくさんいる。

- ・ 「噴火のとき一人だったから怖かった。一人暮らししていて、話し相手がいない。テレビばかり見てる。」(80代・女性)
- ・ 「灰はたくさん積もっているから自分で取ろうとするけれど、歳なのでなかなか全部取りきれない。」(70代・女性)
- ・ 「肩がすごく凝って夜になると右腕がしびれて痛みで起きてしまう。」(80代女性)
- ・ 「骨粗鬆症なのでつらい。」(70代・女性)



○灰降ろし作業の過酷さ

ボランティアが来て作業が進んだことを喜ぶ声を多く聴いた。一方で、生活道路などの作業はなかなか進まず、住民の方の生活空間には常に灰がある状況が続いている。

- ・ 「自分達だけじゃどうしようもないと思って

たところで皆さんがきてくれた。本当に助かった。また絶対復活させる。」(50代・男性)

- ・ 「屋根の上は掃除したが、道路、地面などは放置。」(70代・女性)

○ボランティア不足

ボランティアセンターが閉所してから、戸別訪問していくとまだまだ作業が進んでおらず、ボランティアの手が必要なことがあきらかだった。ボランティアを頼んでもなかなか来ないからという理由で業者にお金を払って作業をしてもらっていた方が何人もいた。道具がなくてできないと思ひこんでいる人など、情報不足も問題だ。

- ・ 「ボランティアはあたらなと思ってたから、業者に頼んで屋根は降ろしてもらった。」(60代・女性)
- ・ 「雨どいをお願いしたいんだけど、長い梯子がなくてお願いができなくて...」(40代・女性)
- ・ 「丁寧な作業で、とても助かった。ここも気になるけど...」(80代・女性)
- ・ 「屋根や庭などに積もった灰はボランティアの方々に取ってもらった。」(70代・女性)

○疲れの蓄積

やってもやっても終わらない作業に前半以上に疲れの蓄積が見られると感じた。またこの時期は特に噴火の度に都城市に降灰があったため「またか」という声も多く聴いた。灰がかなりストレスとなっている方も多く、心のケアが必須だ。

- ・ 「(玄関先は) 風に舞いあがって灰が入ってくるから、水を撒くんだけど、そうすると靴が汚れて、また灰が玄関に入ってくるのよ...」(60代・女性)
- ・ 「...朝が起きられん。なんでだろうなあ...」(50代・男性)
- ・ 「また積もったよ。最初の噴火の時みたいに真っ白になった。」(60代・女性)
- ・ 「疲れるよ。こんな生活が50~60日だもん。」(40代・女性)

- ・ 「目に火山灰が入って炎症を起こしている。今眼科に通院している。」(80代・女性)
- ・ 「もう疲れた。」(30代・男性)
- ・ 「誰かに話を聴いてほしかった。ここ(喉)までつまっていた思いが、ここ(おなかのあたり)までにおさまった。」(70代・女性)

○足湯の効果

お寺や戸別訪問でさせていただいた足湯では、「きもちいい」との声を多く聴いた。足湯に初めて参加したボランティア側からも、足湯をすることで住民の方との距離が縮まるという感想があがった。

- ・ 「集まれる場所があるってのはいいね。足湯は気持ちいい。あったまる。」(70代・女性)
- ・ 「足湯をやっているのを見て、最初はその意味がわからなかった。でも自分がやって見てその効果を実感したよ。私もこれから(高原で)やっていきたい。」(50代・女性)
- ・ 「テレビで足湯見たよ。東北でもやってるからね。私も足湯で元気もらったから。」(70代・男性)

○避難所の課題

2月15日に閉所した避難所のことを思い出して、「夜眠れなかった。」などの声を聴いた。また、土石流が発生した際の指定避難場所が、自宅よりも低い場所にあるため、それを不安に思うという声も聴いた。

○農業・畜産・商業の課題

数日、数か月の問題ではなく、数年単位の問題を抱えている人がたくさんいる。特に収入の面も深刻で、先の見通しもつかず、不安に陥っている。育ててきたブランドを大事にしたいことから、外部からの買い付けを渋る姿もあった。なんらかの補助策を打ち出さなければ、ブランドどころか農家さん自体が存続できなくなってしまう。

- ・ 「農業は灰で大打撃。しいたけの原木までだめになった。」(50代・男性)
- ・ 「4,5月に野菜を植え始めるが、灰が積もって雨が降ると固まってしまう。」(80代・女性)
- ・ 「もう売れない。健康被害が心配。これまでブランドとしてやってきた品質にキズがつくと、すべておしまい。椎茸は成長を待つのに2年はかかる。うちも親戚も椎茸だけで生活してる。今年は収入は0。売れても1/3の価格。採算があわない。国の偉い人がきて「頑張ってください」というだけ。何の保障もない。団体で国に訴えるにも椎茸農家の数が少なすぎる...自宅のことはやってない。いつも手伝ってくれる人たちは自宅のことで大変だから、他に誰か手伝ってほしいのよ。」(60代・女性)
- ・ 「小さな農家さんは必至よ。お金がないんだから。」(40代・女性)



○噴火への恐怖

前半に比べて、噴火に対する恐怖の声が減ったが、噴火当初の話題になると、当時を思い出して口を揃えて「恐かった」と言う。また、噴火の度に常におびえている人がいることも事実だ。

- ・ 「噴火したときは怖くて夜も眠れなかった。」(80代・女性)
- ・ 「自動車の窓ガラスが噴石で割れた。噴火していると安心できない。」(40代・女性)
- ・ 「一昨日の噴火では、これまでで一番高い4,000mの高さの噴煙だったが、音がなかったためしばらく気付かなかった。」(30代・女性)
- ・ 「家で戸が開まる音や、道路でトラックが通

る音を聞く度、噴火ではないかと構えてしま
う。」(40代・女性)



○感謝の気持ち

3月に入って、学生ボランティアさんの参加が
増えたこともあり、若い人が手伝いにくることに
喜ばれる方の姿をたくさん見かけた。

- ・「こんな若い人がたくさんいるのは久しぶり
〜」(60代・女性)
- ・「高原に来てくれてありがとう」(50代・女性)

○東日本大震災の心配

地震発生後は、新燃岳の噴火が小康状態とい
うこともあり、地震の話題で持ち切りだ。自分たち
も苦しみを知っているからこそその発言だと感じる
場面も多い。ただ、「自分たちだけで頑張らなけれ
ば」という思いが強くなりすぎることに不安があ
る。いつまた大きな噴火があるかもしれないとい
うことを忘れないようにしなければならない。

- ・「(地震のことが気になり) 噴火以降初めて、
新燃岳を一日に一度も見なかった。」(40代・
男性)
- ・「宮崎は口蹄疫、鳥インフルエンザ、新燃岳
噴火とふんだりけったりだと思っていたが、
今回の地震を思うと自分たちで頑張らない
と。」(70代・女性)
- ・「うちはもう大丈夫。東北の親戚が心配。」(60
代・女性)

■つづやきの分類からみえてくる課題

- 不安：不安を少しでもやわらげるために、正しい情報と、今後の防災対策・方針を練る必要がある。
- 高齢者の問題：自分から動けない、声をあげられない方に対して支援の手が届きやすい仕組みが必要。
- 灰降ろし作業の過酷さ：大変な作業を周りの人がスムーズに手伝えるようにする必要がある。住民が自分たちだけで解決することは無理である。
- ボランティア不足：ボランティアの集め方・受け入れ拠点を決めておく。
- 疲れの蓄積：長期戦が必須のため、どのように疲れた心と身体を癒すのか。そもそも疲れ切る前に対策できることを考えておく。
- 足湯の効果：癒しの効果や、リラックス効果もある足湯は好評だったため、地域で活用できる場所があれば活用してもらおう。
- 避難所の課題：避難所生活はまたいつ始まるかわからないため、次に避難所を運営する場合を想定し、今回あがった課題を解決できるように、必要な人員や、対策を準備しておく。
- 農業・畜産・商業の課題：それぞれの産業が持続可能になるために、町全体での対策が必要である。一軒一軒の事情をお聴きし、お手伝いできる人員(ボランティアを含む)・金の確保も必要である。
- 噴火への恐怖：小康状態であっても、まだ噴火は継続しているため、正しい知識と対策を住民のひとりひとりが考えていく必要がある。それを町が主導していくことが望ましい。
- 感謝の気持ち／東日本大震災の心配：すばらしい「お互い様」の気持ちを大切に、支援する側・される側の両方を経験したからこそ、また次に支援が必要となった際には、「助けて」という声をあげてほしい。

※別紙 2

「新燃岳噴火災害の被災地・高原町を全国から応援しよう！」企画

日時：2011年3月6日（日）10：00～12：30

場所：高原町 光明寺

内容：拠点とさせていただいた光明寺で、毎月6日に行われる永代経法要にあわせて、青山学院大学の学生20名と協力し、足湯、お茶会、全国からの応援メッセージ・グルメのお届けを行った。

協力者：あいち生協（お花見団子）・市原市災害ボランティアネットワーク（応援メッセージ）・松野博さん（なが餅）・P&I Logistics（お好み焼きセット）・山本真澄さん・康介君親子（「こうちゃん農園のたまねぎせんべい」）・中日本冰糖（冰糖砂糖）・名古屋のボランティア一同（応援メッセージ）



●新燃岳噴火に関するタイムテーブル

(2011年4月10日現在)

日時	新燃岳噴火・土石流の状況	前回の噴火からの日数	噴煙の流れた方角	政府・行政の対応	避難状況	その他
1月26日(水)	噴火(1回目) 噴煙2,000m		-			
1月27日(木)	噴火(2回目) 噴煙2,500m	1日	南東		19世帯31人が自主避難	
1月28日(金)	噴火(3回目) 噴煙1,000m	1日	東			
1月29日(土)				松本防災担当大臣 視察		
1月30日(日)	噴火(4回目) 不明	2日	-			
1月31日(月)				避難勧告発表(513世帯 1158人)(高原)	約300人避難	牛300頭を避難。うち143頭を畜連へ。
2月1日(火)	噴火(5・6回目) 噴煙2,000/2,000m以上	2日	南東/真上			
2月2日(水)	噴火(7・8・9回目) 噴煙2,000/500/3,000m	1日	北東/東/東			
2月3日(木)	噴火(10回目) 噴煙1,500m	1日	東			
2月5日(土)				避難勧告大幅解除(高原)	27世帯73人が継続(北狭野、南狭野、花堂3地区)	
2月7日(月)				高原町災害ボランティアセンター開設(高原) 政府支援チーム被災地入り避難計画策定へ		
2月8日(火)				農林水産省 農家支援策を発表		(震つな)ほほえみ館にて足湯開始
2月10日(木)	雨による土石流発生のおそれ			避難準備情報発表(1,649世帯3,544人)(西岳・山田)	79人が自主避難	
				避難準備情報発表(100世帯約200人(花堂、小塚、北狭野、南狭野、祓川、湯之元、蒲牟田)(高原)	95人が自主避難	
2月11日(金)	噴火(11回目)噴煙2,500m	8日	南東	宮崎県 「激甚災害指定」を要請		畜連 143頭中92頭を市営牧場へ。残り51頭中11頭を農家へ、40頭を売却
2月12日(土)				松本防災担当大臣 視察(高原)		
2月13日(日)	雨による土石流発生のおそれ			避難準備情報発表(1,150世帯 2,500人)	自主避難者あり(都城) ほほえみ館35人(高原)	
2月14日(月)	噴火(12回目)噴煙不明	3日	-			
2月15日(火)				避難勧告前面解除(27世帯 73人)(高原)		(震つな)ほほえみ館での足湯終了
2月16日(水)				「ほほえみ館」の避難所閉鎖(高原)	避難所閉鎖	
2月17日(木)				避難勧告発表(都城市・1148世帯2,523人) 避難準備情報発表(高原・7地区の99世帯1事業所の計248人が対象)		雨が市の基準の「総雨量20m」に達する可能性が高いと判断
2月18日(金)	噴火(13回目)噴煙3,000m	4日	南	文科省 緊急研究費3,800万円		想定されている地下のマグマだまりが、18日までの10日間で膨張している兆候がみられる
2月26日(土)				岡田幹事長 高原町内視察		
3月1日(火)	噴火(14回目)噴煙不明	11日	-			
3月3日(木)	噴火(15回目)噴煙不明 ※3日15:15～4日11:00まで継続	2日	-			
3月8日(火)	噴火(16回目)噴煙不明 ※8日2:50～6:00まで継続	5日	-			
3月13日(日)	噴火(17回目)噴煙4,000m	5日	南東			被災地車座トーク開催(都城市・高原町)
3月22日(火)						九州の国立大学の教授らが視察。土石流対策のた
3月23日(水)	噴火(18回目)噴煙1,000m	10日	南東			
3月29日(火)	噴火(19回目)噴煙500m	6日	南東			
4月2日(土)						火山情報などを提供する災害放送局「JOYZON—FM たかはるさいがいエフエム」を開局した。1日3回、定時に放送。
4月3日(日)	噴火(20回目)噴煙3,000m	5日	東			

<火口周辺警報(噴火警戒レベル3、入山規制)が継続>

・降灰の受入状況については、3月25日現在、個人持ち込みの累計が221,720kg、委託収集分の累計が517,210kgです。

合計は738,930kgとなっています。